

課題文は以下のように述べている。ドーピングの問題を考えるについて、近代スポーツが前提としてきた人間観・身体観に注目する必要がある。それは、他者を否定することによって世界の主体になろうとする人間、個としての自律性・完結性を保っている身体でなければならなかった。ドーピングは、この人間観・身体観を否定するものである。それと同時に、ドーピングは無限の進歩を求める近代スポーツの必然でもある。

確かに、人間が記録や勝利を追い求めていく限り、ドーピング技術の開発を推進していくことは、ある意味で必然ともいえる。特にスポーツと国家の威信、選手の名誉・経済的利益が密接に関係している現代において、ドーピングが完全になくなることは、まずないだろうと考えられる。

しかし、私はドーピングについては、あくまで反対すべきであると考え。理由は以下の通りである。まず第一に、我々が共有している近代の人間観・身体観に明白に反するからである。つまり、ヒーローの資格をもつ人間は、個としての自律性・完結性のある身体をもつべきだからである。そもそも、我々はスポーツに人間の才能や、努力の極限を見ることにより、そこに感動を覚えたいのであって、決してサイボーグやロボットの戦いを見

ようとしているのではないのである。

第二に、医学的・人道的にみて、ドーピングを認めるべきではない、と考えるからである。ローマ・オリンピックの際の死亡事故、ソウル・オリンピックの百メートル競争の金メダリストであるジョイナーがドーピング疑惑の中で引退後急死した例等をもみてもわかるように、ドーピングは選手の生死に関わる側面を持っている。ドーピングについて、たとえ選手本人が承知していたとしても、医学上と人道上の見地より、それを認めるべきではないのである。(句読点とも 767 字)